



ショートコメント

★★★

Data 2023-60

監督・脚本：ミア・ハンセン
 =ラブ
 出演：レア・セドゥ／パスカル・グレゴリー／メルヴィル・ポポー／ニコール・ガルシア／カミーユ・ルバン・マルタン

それでも私は生きていく

2022年／フランス映画
 配給：アンプラグド／112分

2023（令和5）年5月18日鑑賞

シネ・リーブル梅田

みどころ

夫と死別した後も、仕事、子育て、父親の介護と大奮闘する本作はフランスならではの！ミア・ハンセン＝ラブ監督は父親との関係に焦点を当てて、自らの体験を本作に込めたが、主力はどっち？

『ある美しい朝』と題する原題では、『ファーザー』（20年）と同じように、記憶と視力を失っていく老いた父親に重点を置こうとしたはず。ところが邦題が『それでも私は生きていく』とされたのは、再会した同級生との恋模様があったと驚くスピードで進んでいくためだ。

レア・セドゥのポンドガール役は魅力的だったが、長々と続く“不倫ドラマ”に見るチョー肉感的な彼女にはビックリ！こりゃ、ちょっと製作意図がズレてしまったのでは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆ミア・ハンセン＝ラブは『未来よ こんにちは』（16年）（『シネマ39』260頁）、『ベルイマン島にて』（21年）（『シネマ51』122頁）等の映画で有名。他方、フランスの美人女優、レア・セドゥは『007』のポンドガール等で有名。ミア・ハンセン＝ラブは自分や自分の家族を題材にして映画を作ることが多いが、本作は自分と自分の父親に焦点を当てた上、レア・セドゥを主演に起用することを前提として“あて書き”をしたそうだ。

しかして、本作導入部では、5年前に夫と死別したサンドラ（レア・セドゥ）が、仕事に子育てに、父親の介護にと猛奮闘する姿が描かれる。日本ではこんな女性の生き方は困難だが、自立と自由を両立させている国フランスなら、これも可能・・・？

◆哲学の教師だった父親ゲオルグ（パスカル・グレゴリー）は、さまざまな哲学書に囲まれた生活が似合っている。しかし、記憶と視力を失っていくという原因不明の病魔に侵された今は、介護が不可欠な状態らしい。しかも、その病状はどんどん進行しているから、早急に介護施設に移さざるを得ないが、その介護プランは？民間の介護施設がカネ次第と

いうのは日仏共通だが、公的介護はひょっとして日本の方がマシかも。本作を見ていると、そう思うてしまうが、さて・・・？

ゲオルグの介護をめぐっては、ゲオルグの元妻フランソワーズ（ニコール・ガルシア）や現在の恋人レイラも絡んでくるからややこしい。そこでサンドラにとって都合が悪い（？）のは、ゲオルグの記憶の中に現在の恋人レイラは明確に位置づけられているが、実の娘サンドラの記憶は少しずつ薄れているらしいこと。すると、そのうち『ファーザー』（20年）（『シネマ49』26頁）で観た、アンソニー・ホプキンス演ずる認知症の父親が介護している実の娘に対して「お前は誰だ？」と尋ねていたような事態になるかも・・・。

◆ある日、たまたまサンドラが亡き夫の友人で旧友のクレマン（メルヴィル・ブポー）と出会ったところから、驚くべきスピードで2人のベッドインとなんと生々しい不倫ドラマ（？）が展開していくので、本作ではそれに注目！サンドラの方は夫と死別しているのだから、一人娘のリン（カミーユ・ルバン・マルタン）が拒絶感を示さない限り、クレマンと“親密な関係”になるのは自由。しかし、クレマンには妻子がいるのだから、いくらフランスでも、そんな不倫ドラマの展開は難しいはずだ。

そう思っていると、クレマンはいとも簡単に（？）サンドラのアパートに転がり込み、サンドラとはもちろん、リンともいい関係を築いていたが、サンドラの度重なる「愛人状態はイヤ！」との声を受ける中、結局、「妻子は捨てられない」として、サンドラと別れることに。そこでサンドラが泣き喚かないのは、さすがフランス流の自立した女性だが、この不倫ドラマのその後の展開は？そして本作の結末は？

◆私にとっては、『007』シリーズ2作で見たボンドガール役のレア・セドゥよりも、『イングリシアス・バスターズ』（09年）（『シネマ23』17頁）と『アデル、ブルーは熱い色』（13年）（『シネマ32』96頁）で見たレア・セドゥの方が強烈だった。彼女の出演作は多岐に渡っているが、本作の“不倫ドラマ”に見る肉感的なレア・セドゥの姿ははじめて！『美女と野獣』（14年）（『シネマ33』未掲載）で観た、お姫様のようなレア・セドゥとは大きく違うその姿にビックリ！これはホントにミア・ハンセン＝ラブ監督が自分を振り返りながら“あて書き”した映画なの？

本作は『それでも私は生きていく』という邦題になっているが、原題は『ある美しい朝』だから、ミア・ハンセン＝ラブ監督の真の狙い（意図）は、レア・セドゥよりも、父親のゲオルグに焦点を当てた映画にしたかったはずだ。本作については、そんな適切な評価をしているWebサイト「そんなには褒めないよ。映画評」があるが、私はそれと全く同意見だ。仕事に子育てにそして恋愛（不倫？）に奮闘する自立したフランス人女性というイメージは大切だが、あまりにも肉感的でセックスに奔放なレア・セドゥはあまり見たくなくなったというのが私の正直な心境だ。

2023（令和5）年5月19日記